

第6回宮崎海岸市民談義所 議事要旨

日時：平成 21 年 12 月 9 日(水)19:00～21:30

場所：佐土原町総合支所 2F 研修室

事務局より開会の挨拶を行った後、市民連携コーディネータの進行により議事が進められた。

まず、事務局より「談義所の役割、談義のルール等」、前回実施したアンケートの結果について説明した後、「台風被害の対応について」、「平成 21 年度養浜について」の報告を行い、質疑応答を行った。

次に、「市民による発表」(2 名の方が発表)をしていただき、質疑応答を行った。その後、市民からの『宮崎の海岸をみんなで美しくする会』の活動の報告があった。

事務局からの報告に対する質疑および市民発表の内容は以下の通り。

【今回出席の関係機関】

(国)宮崎河川国道事務所海岸課、(国)宮崎海岸出張所、(国)宮崎港湾・空港整備事務所、(県)河川課、(県)港湾課、(県)自然環境課、(県)農村整備課、(県)宮崎土木事務所、(県)中部港湾事務所、(県)中部農林振興局 農地整備課、
宮崎市 土木課、宮崎市 佐土原総合支所 建設課

【台風被害の対応について】

参加者：構造物を作ったことによって砂が逃げて災害が起きた。構造物をつくと永遠に災害が続き美しい砂浜がなくなる。流木を使った工法であれば、浜崖箇所にも砂嘴ができ、砂浜を復元する。防災、生態、環境、利用に対しては効果がある。

参加者：気象災害の強さは増幅してきているので、従来の考え方で対応は無理なのではないかと感じる。

参加者：農村整備課の二ツ立地区の護岸復旧では土壌改良は考えているのか。吸出し現象に、単に砂だけで対応するのか。

参加者：最近動物園裏の海岸は砂浜がほとんど削れてしまっている。石崎浜から大淀川にかけて砂浜が残っている唯一の場所なので、早く構築物でも何でもいいから対策してほしいと思っている。

参加者：海岸勉強会で、ビーチサイクルとか砂の動きを勉強してきた。台風や高波で砂が持ち去られても、何ヶ月か一年たてば、少し沖にある砂はまた戻ってきて、砂浜は修復されると聞いている。削られたから大慌てでそこに護岸を作るとか、自転車道路が壊れたからすぐ補修するとかではなく、もうちょっと待ってもいいのではないか。

赤江の浜のときも、大急ぎで人工リーフを作ったが、そのあと砂が大分戻ってきたので人工リーフはなくてもよかったと思っている人はたくさんいる。災害復旧事業で予算を得るために急いでいるのだと思うが、もう少し砂浜の自然のサイクルを考えた対策をとっていただけたらと思う。動物園裏について今回は様子を見るという判断は、いいことだと思う。

参加者からの質問に対する回答

自然環境課：クリーンパーク裏については、人家5戸、市の公共施設、田んぼ、養鰻場、市道、県道等の重要施設がある。今回の災害箇所については、後背地の林帯幅も狭く重要な保全対象があり、早急な対策が必要なため災害復旧事業を予定している。

動物園北側等で延長にして600m近い侵食を受けているが、侵食幅がせまく、後背地の保安林の林帯幅も比較的広いため、現時点では国交省が行う養浜工の状況を見守り、様子を見ていきたいと考えている。

農村整備課：陥没箇所の吸い出しへの対応は、コンクリートを予定している。今後、吸出し箇所の確認をしていく中で、対応を見直しすることも考えられる。上側もコンクリートを張る予定である。

事務局（河川課）：1，2，3号は離岸堤を嵩上げしたことによって背後に砂がついているのが分かると思うが、4，5，6号は離岸堤が沈下しているので、砂のもっていかれかたが激しく、護岸のところまで波がきている。これを、1，2，3号くらいの砂のつき方になるまで、原形復旧していくことを考えている。

コーディネータ：災害復旧ということで、対応には制度上の制約がある。また、「早くやらない」という意見と、「もうちょっと様子を見てもいいじゃないか」という意見があって、どちらが大事ということは言えない。お互いが話し合う中で、災害復旧という状況のなかで、納得できる解を見つけていかなければいけない。

事務局（国交省）：今説明のあったものでは、災害復旧ということで、発生した被害へ対応するという事業であるが、宮崎河川国道事務所で侵食対策を行なっているのは、長期的に、なるべくこの海岸で災害が起きないようにしていくという観点で対策を検討している。

ビーチサイクルがあるからもう少し長い目でみてもいいのではという意見と、一方、砂浜がなくなっているので早く今すぐにでも対策をしなければいけないという意見があった。確かに、砂浜はついたり流れたりしていると思う。宮崎海岸では北から南に砂が流れていると言われており、北から流れてくる砂と南へながれていく砂の量がつりあっている状態であれば、砂はついたり減ったりしながら、平均すると砂浜の幅はかわらないということで維持されていく。しかし、住吉の海岸から、毎年20万 m^3 の砂が南の方へ流れていっているという状態なので、ついたり減ったりは年々後退する中で起こっている状況だと思う。よって、我々としては宮崎海岸をこのまま放っておいていいとはまったく思っていない。急いで対策を検討していかなければいけないと思っている。

参加者：一ツ瀬川のところは人家や田畑が迫っていて、大急ぎで対策をしなければならないが、離岸堤のところは人家がなく、有料道路しかないので、離岸堤背後にたまっている砂を、一ツ瀬川のところへもってきて応急処置をするということではできないのか。急ぐ必要があるところが二ツ立のところであるなら、それほど急ぐ必要のない南の方から砂を持ってくることが出来るのではないのか。有料道路より人家や田畑が大切なわけですから。

参加者：有料道路は重要でないという意見には反対である。有料道路は津波が来たとき、津波をブロックする重要な役割を果たす。宮崎市が津波に飲まれるか飲まれないかの境目

になる。

参加者：津波からの防護のために広い海岸林があるのだと思う。

【平成 21 年度養浜について】

参加者：養浜の予算は年間にどのくらいなのか。

参加者：住吉海岸沖への養浜は、もうちょっと北の方、たとえば石崎浜より北の方に持っていけないのか。砂は南の方に移動すると言われているので、住吉海岸沖に投入したらすぐまた航路の方に溜まるのではないか。

参加者：養浜は、海に投げ捨てるというのは簡単で、技術的な内容じゃないと思っている。宮崎県は、運動公園を 10 年かけて作ったが、これは波の作用を利用すれば 5 年間で整備できる。もっと効果のある事業の展開をするべきではないかと思う。コンクリート構造物というのは一番手当が難しい。そこをもう少し研究してほしいと思う。砂浜は、海の作用、波の作用を十分に活用すれば自然に砂は付く。このあたりを十分に検討してもらおうと、対策が早く進むのではないかと思う。

コーディネータ：ずっと確認されていることの一つに、ダムにより、海に流れ込む土砂の絶対量が減っているということもひとつ大きな現象としてあるので、それを抜きにして「砂は付きます」と言ってしまうのは少し乱暴な気がする。その話は詰めないといけないので、今ここで私が正しいとか正しくないとか判断するものではないが、注意しながらやらないといけないと思う。

参加者からの質問に対する回答

事務局（国交省）：宮崎河川国道事務所の予算で去年から実施している石崎浜と動物園裏の二箇所について、1 億円程度の予算である。

中部港湾事務所：富田浜の航路埋塞の浚渫は、維持浚渫としてやっている。年によって、埋塞の度合い等により変わってくるが、ここ数年はだいたい 2000 万～3000 万円である。マリナーの浚渫事業も年によって違い、台風などで大きく航路が埋塞した時はまとまった量が出る。今年度は 2200 万円の予算で維持浚渫している。

事務局（河川課）：三財川の方は、平成 17 年の災害で、西都市の三財川の方が破堤し、堤防背後のビニールハウスや家が相当浸かったため、河川改修事業で河川内の堆積土砂を掘削して、その土砂を海岸に持ってこようというものである。正確な金額は今持ちあわせていない。

事務局（国交省）：三財川や小丸川の工事は、この海岸の工事がなくても、もともと工事を予定のところから発生するものを有効利用しているという事業である。もし、どこかに海岸事業として土砂を取りに行くということになるともっとお金がかかるが、土砂浚渫・掘削事業と連携をすることによってコスト縮減しているものである。

コーディネータ：養浜の必要経費について曖昧なところは、データを今後出してもらうことにする。

宮崎港湾・空港整備事務所：浚渫関係の事業費については、今年度は 2 億 6 千万円である。それから養浜土砂をもっと北の方に入れては、というご意見については、今は南側で侵食が進んでいるので、ここに近い北側に投入しているところである。

参加者：南側に砂がないから住吉海岸沖に投入するとのことだが、いま、市民が関心があるの

は砂浜が残っている動物園裏から石崎浜、一ツ瀬川河口である。このことを考慮して検討していただけないか。

コーディネータ：事業仕分けなど、国の大きな事業の方針が変わりつつある中で、分かる範囲で今の状況を報告していただきたい。

事務局（国交省）：宮崎海岸侵食対策は事業仕分けの対象にはなっておらず、仕分けの場では議論されていない。また現在、全国の海岸事業全体での予算をどのくらいにするのかというのを本省が要求している。例年であれば、だいたい12月に額の全体の枠が決まり、そのあとに個別の事業に予算が配分されるという流れになる。

【市民による意見発表①】

- 東町という、石崎川の左岸側河口の地区に住んでいる。このあたりは佐土原藩の時代は耕作不適地ということで湿地と砂丘だったが、戦前から開墾をしていた。
- 昭和38年の那珂小学校の写真を見ると、宮崎海岸は砂浜が約200mあり、砂丘だったことが分かる。
- 参考資料をまとめて、年明けごろに資料集を完成させる予定である。出来上がった資料集は海岸出張所に置かせてもらったり、各自コピーをとってもらったりしたい。
- ハマゴウは地面を這っているが実は木である。風があまり強くないところでは1mくらいの木になる。ハマゴウは崖の上でも生息できるため、松林が浜崖ぎりぎりまで来ているところでない崖の下には来ない。植物は海を守っている。
- 海岸の木は、海岸風衝低木林といって、一番前が低くて、うしろにいくにつれて高くなる。これは刈り込んでいるのではなく、何十年たっても(自然に)その形になっている。
- 湿地に生えてる葦(ヨシ)も、地面を守っている。
- 佐土原町では過去に、ボーリング調査がやられている。海岸だけでなく陸の方まで砂地だということが分かっている。6000年前までは海だった。海から岩になるには圧力、熱、時間が必要だが、まだここは完全には岩になっていない。岩になっている部分でももろい岩であり、侵食されやすく、地震がきたら液状化が起こりやすいところである。以前外所地震で赤江の南側(外所)が沈んだが、宮崎港の防波堤によって宮崎市が外所と同じ地理条件になっている。同等の地震が起きたら今度は宮崎市が海に沈むと思う。
- シーガイアのところなど、木を間伐していて松林に隙間が出来ているが、このようなところは地面がもろくて侵食されやすい。低木林が密集して藪になっているところは地面をがっちり守っているが、このようでない住民としては不安で仕方がない。よって、木を切って公園を造るなどというのは絶対にやめてほしい。低木や藪や雑草を切るのもやめてほしい。

【個別質疑】

参加者：発表者の言われていることには、賛成はしているが極論の可能性はあると思う。

参加者：自然災害の方は、海岸距離が長いし、台風が長く居ると風速、吹送時間も長くなれば、当然こういう災害は出てくると思う。ただ、現時点の統計上では、台風の発生数というのは温暖化との相関はないと言われている。これが相関しだすと、これまでの台風の漂砂という考えでは対応しきれなくなって、私の意見では、あと何m下がるかというその

へんで議論することも必要ではないかと思うので、その点ではおっしゃっていることには賛同する。

発表者：それから、宮崎港は即刻廃止してほしい。私たちの家は低地なので怖くてしょうがない。前台風があった時に直立護岸が倒壊してその横がまっすぐ掘れてしまっている。

コーディネータ：先ほどの有料道路の話もだが、簡単に必要とか必要じゃないというのは乱暴かなと思っている。そういうふうに認識されている方が居るという事実はそこにあるが、それについてはもう少し慎重なスタンスを取るべきだと思っている。

港湾課：確かに宮崎港ができて、宮崎海岸の侵食を促した一因であるということは私どもも認識している。ところが、これを全部取っ払って元の砂浜に戻せということになると、取り除くための費用もさることながら、宮崎港では、1年間に1350億円の経済効果があり、1万8千人の雇用を抱えている。宮崎港を取り除くことでこれらの方から職を奪ってしまうというのはちょっと乱暴かと思う。そのほか、たとえば宮崎港からフェリーが出ていて、トラックが大阪まで走っていくよりもフェリーを利用することで、二酸化炭素を3万5千トンくらい削減できる。これは宮崎市の面積の40%分くらいの面積の森林を持たないと消化できない量である。宮崎港を取っ払うのではなく、今ある姿でどうしたら侵食を防いでいけるのかということで議論を進めていただけたらと思う。

【市民による意見発表②】

- この発表の根拠としては、宮崎市の水を考える会が3年かけて大淀川の治水を完成させた記録を「大淀川は蘇るのか」という冊子にまとめて、去年8月に発表している。私も担当者として参加している。のちほど出張所に寄贈するので、興味のある方はご覧になってください。
- ミネラルウォーターの値段がガソリンの2倍近くであったり、一軒のうちで3~4台も車を所有していたり、自分が小学校のときからは考えられないような生活の変化がある。
- 昭和21年生まれで、日南市の広渡川中流で生まれ育った。子供時代の夏休みは川で泳いだり釣りをしたりして遊んだ。川でも海でも川魚やサザエなどのタンパク源で、楽しみながら手に入った時代だった。
- ところが今では川や海岸の生態系は瀕死の状態である。東京など人口が集中しているところでは下水道整備等が進みやすく、川は比較的早く生態系を回復することができるが、大淀川・広渡川流域では森の荒廃、ダムを含む川の構造、生活排水の浄化槽の未整備、家畜の糞尿処理、除草剤や農薬などが海の生態系に与える影響が著しいばかりで回復は容易なことではない。また、豊かな生態系の中で進歩してきた人間にとり、共存してきた仲間が次々と地球上から姿を消していくことは人間の死活問題でもある。しかも、この危機的な状況を引き起こした諸悪の根源はすべてわれわれ人間にある。
- 最後に皆さんに問いかけたい。皆さんは川の近くで、昔のよううるさい川のせせらぎを聞くことはありますか。海岸の近くで昔みたいな潮騒を聞くことはありますか。昔のようあの独特の潮の香りを感じることはありますか。最後に、そして何故今、一ツ葉の海岸が失われつつあるのですか。

【個別質疑】

参加者：私の家は川の横、海のそばで、海の音は毎日聞いている。

参加者：自分が小さい頃はまだ地引き網があり、頻繁に海に遊びに行ったり、地引き網に連れて行ってもらったりしていた。自分にも子供ができて、夏休みになると海に遊びに連れて行く。自分の子供は頻繁に連れて行くが、たまに近所の子供たちと一緒に連れて行くと、地元に住んでいて徒歩5分くらいで一ツ葉の浜に出られるにも関わらず海でほとんど遊んだことがない、遊びに行くときは人口ビーチに行くという状況で、寂しく感じる。

「侵食を進める侵食対策」という発言があったが、今まさにそういう状態だと思う。くさいものにふたをするように、構造物を作ってまた構造物をかぶせる。たとえば、一ツ葉海岸では、だんだん構造物を設置することによって対策箇所が北の方に進んでいる。いま目の前の侵食しているところに構造物を入れれば、さらに北側に進んで、富田浜から高鍋から、ずっと侵食が進行していく。これから、自分の子供たち、孫にあたる世代まで考えた時に、砂浜をやっぱり残してやりたいという気持ちが強いので、やはりそのところ、自然のサイクルを利用した工法を考えてほしいと思う。

【『宮崎海岸をみんなで美しくする会』の報告】

メンバーは地元4名、野生動物研究会、海岸利用者、市民、檣地区、一ツ葉入江地区 計9名である。また目的は「市民によるルール作り」である。

第1回の会合では、現地を歩いた。

第2回の会合ではスケジュールとして、7つの課題について3月までになんらかの答えを出すこととなった。

会合では車の乗り入れが一番問題になっている。宮崎では長年にわたりウミガメの調査がされており、そういうところに車を乗り入れているということについてももう少し考えてほしいという意見がある。車の乗り入れの原因は車上荒らしの多発だと分かった。解決策として、石崎浜の高台になっているところ（海から見えるところ）に駐車スペースを設けたらどうかという意見がある。

また、石崎浜荘周辺には貴重なセラピーエリア（希少植物）がある。ここは台風が来るとゴミ漂着場となるが、自然観察会など通じて市民みんなの宝物にしようという意見がある。

次回はこれらについて予算面含めた検討、維持管理の検討をする予定。その他、保安林管理者にも出席してもらいたいという意見があった。

【閉会、その他】

コーディネータ：昔の海岸の写真、海岸で遊んでいる写真、松林など、いろいろな海岸にまつわる写真があったら貸していただきたい。

参加者：ひむかの砂浜復元ネットワークが、来年2月6日（土）午後、市民プラザ代会議室で海岸シンポジウムを開催する。

以上